

野口泰生先生と地理学教室

長谷川 均

国士館大学地理学教室は、2016年に創設50周年を迎える。その年の3月に、教室の歴史の半分以上を支えてきた野口泰生先生は停年を迎えることになる。

先生は、1983年に国士館大学に着任された。この当時、地理学教室の第二世代であった大崎晃先生、長島弘道先生が教室運営の中心を担っておられた。地理学教室の第一世代は、他大学で功成り名を遂げられた先生方の寄合所帯のようなものであったらしい。そういう方々を招聘して、文学部史学地理学科地理学専攻は認可され設立された。そこから運営を引き継ぎ、大学や教室の近代化を目指していた第二世代の両先生にとって、ミンガン大学からやむなき事情で帰国された野口先生は、大きな戦力として迎えられた。このあたりの話はいずれ教室の歴史の中で書かれることになるだろうからここでは省略するが、野口先生を迎えたころの話は、いまだお元気なお二人からしばしば聞かされる昔話である。

野口先生は、見事この期待に応えられ、次々と教室の改革に参画された。例えば、80年代後半に始まった近代的なカリキュラムの導入などはその一例であろう。多くの大学が「〇〇学特殊講義」など、何を教えているのか科目名からはわからない名称を使っているなか、これを改めることを最初に始めたのは国士館大学地理学専攻だったと思う。

日本で大学を終え、一度は企業に勤務されたのちに1970年代のアメリカで、系統的かつ本格的な地理学教育を初めて受けることになった野口先生は、よく当時のアメリカの地理学教育のことを語られるし、それを参考にして国士館大学のカリキュラムに反映させたいと考えられ

たのだろう。また、外から見られることを意識し、日々の教育と研究に励むことが重要だということをおさかんに言われた。そして、10号館入口正面にある地理学研究室の壁面を全部ガラス張りにしてしまった。外から見られてもおかまいなし、どうぞ私たちの教育を見に来てくださいと改築してしまったのも卒論の口頭試験を公開にしたのも野口先生のアイデアだった。また、今でこそ多くの地理学科がカラーのパンフレットを作っているが、最初にこれを作り雑誌「地理」の教室紹介に綴じ込ませたのも先生のアイデアである。

着任後の先生の進取の気質は、教室運営だけでなく学部の教務主任として、あるいは教員組合の書記長として発揮され、大活躍の日々をむかえることになったのである。

ところで、野口先生は昨今のとにかく報告書で実績作りといった風潮のFD熱に冷淡なポーズを見せる。FDは悪くない。しかし、どうぞ私の授業を見に来てくださいといった、いかにもブームに迎合したやり方はどうかな、『見せるための作った授業ではなく、普段の授業を充実させる。わかり易くするだけが大学の授業ではない、「大学」の授業に見合った質や内容を問題にしたい』というのが先生のスタンスなのであろう。このあたりの主張は一貫してブレない。

最後に研究の話をしたい。最近の野口先生はひたすらPCに向かってデータと取り組む日々のように見える。しかし、若いころはフィールドワークを得意とする生態学に通じた気候学者であった。霧ヶ峰で、あるいはハワイ諸島での活躍は今もわたしの目に焼き付いている。

1979年のクリスマス、わたしはホノルル空

港でゴム草履にTシャツのYasuo NOGUCHIの出迎えを受けた。「きみがハセガワくん？」という若々しく少し甲高い声はまだに耳に残っている。オアフ島では、当時先生が発表されたばかりの「Deformation of Trees in Hawaii and Its Relation to Wind. Journal of Ecology, 67, 611-628.」を持っての巡検であった。その後はマウイ島へ飛び、ハレアカラ火山で後に成果としてまとめられることになった構造土と小気候の調査を行った（「Physical Factors Controlling the Formation of Patterned Ground on Haleakala, Maui (Noguchi, Y., Tabuchi, H., & Hasegawa, H.). Geografiska Annaler, 69A, 329-342.」）。この頃の野口先生は、スリムな身体を風になびかせるように飛び回るフィールドワーカーだった。

ミシガン大学での二年間は、後述のように安穩とした毎日ではなかったようだが、つい最近のことグーグルアースで当時住んでいた住宅を

見つけられ、この道をたどると何処そこへ行くと、研究室に呼び込まれた私に熱心に説明してくださった。

日本に戻られてからの先生は、校務で頼りにされたこともあり外へ出かけることが減ってしまった。しかし、ちょうどコンピュータを研究室で持てる時代がやってきたことは先生にとって好都合だった。気象官署やアメダスデータを駆使した研究が1980年代から始まることになる。これ以降、成果の多くは海水温や気温の変化に関するものが中心となり、先生の興味を中心もこの方面に移っていく。またそれと同時に、アメリカの地理学界や地理教育の動向も依然として先生の興味の対象となり続けていることは、雑誌「地理」で公表された最近の成果をみれば明らかである。

このテーマは、先生の経験と密接にかかわっていると思われる。若き日の先生は、ミシガン大学で地理学教室の閉鎖という事件に遭遇され



写真1 マウナケア山頂下、エンストした車の脇で気温を測る若き日の野口先生。1979年12月、長谷川撮影。

た。専任教員という職を失うことになるその時期にあっても、常に教室の危機にまつわる資料をもれなく収集し記録を取るとともに事体の推移を冷静に分析していたようである。つい最近も、この頃の資料一式を送ってほしいというアメリカからの要請に応じておられた。しかし、家庭を持たれた直後に生活の基盤を失うことになるこの出来事は、先生のその後に大きな影響を与えたと考えるべきであろう。

常に外を見よ、地理が外からどう見られているかを気にせよと言いつけてきたのは、地理学の立ち位置、地理の存在意義を意識しない井の中の蛙では、教育や研究、組織の運営はうまくいくはずがない、いつかは破たんするぞという先生からの強烈なメッセージとして受け止めなければならない。

先生の想いを受け継ぐべき私たちであるが、先生の後任人事をスムーズに進めることに失敗した。学内の情勢が後任採用を許さなかったという事情はあるにせよ、国士舘大学地理学教室にとって初めての教員減となる一大事である。私たちが学内で、地理学の存在をアピールすることが足りなかったことは明らかである。外部資金の獲得や研究成果の公表をもっと積極的におこなうべきだったかもしれない。

先生の想いに応えるべく地理学を、地理学教室を発展させることは、先生が苦勞して育ててきた教室を受け継ぐ私たちの責務である。飯能の里で、先生に安心して野遊びを楽しんでもらうためにも、私たちは地理学のためにもっと、もっと頑張らなくてはならない。



写真2 野外実習先の霧ヶ峰で学生に説明する野口先生。2002年10月、長谷川撮影。